文化財見学シリーズ39　姫路市教育委員会文化部文化課（平成９年９月１日発行）

『糸引校区』をたずねて

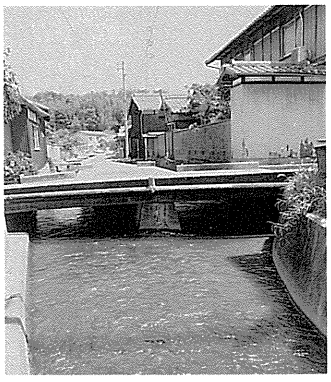
「糸引」校区は姫路市の東南に位置し、旧東山村・継村・奥山村・北原村・兼田村の５ヵ村からなり、仁寿山・小富士山（麻生山）の南裾を東西に伸びる地域である。

「糸引」の由来は、この地域の農業用水を賄うために市川から引いた松原井の別名「糸引井」からとったものであると言われている（江戸時代の『村明細帳』には「糸引井」という名称は見当たらず「松原井」に統一されている）。この地域の歴史は古く、『播磨国風土記』に「継の潮」の記述があり、古代には現在の継地区あたりまで入海が形成されていた重要な港であったことがわかる。また、同書の「安相の里」は麻生山周辺がその遺称地とされているが、里の記載順から市内の今宿あたりとする説もある。

中世に入ると東山地区は石清水八幡宮領松原荘に、継・奥山地区は同継荘に、北原・兼田地区は三野南荘に属していた。東山地区は、古くから塩の生産が盛んで中世には「東山塩」の名前が見られる。（『兵庫北関入船納帳』）。

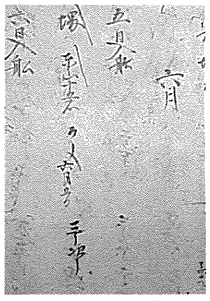
江戸時代の姫路藩大庄屋制度では、松原組、宇佐崎組、妻鹿組に属した。幕末には姫路藩の財政改革に大きな功績を残した家老河合寸翁によって仁寿山黌が開かれ、頼山陽・森田節斉などの碩学が当地を訪れた文教の地でもあった。また、姫路藩の御用窯として高い技術を誇った東山焼の発祥の地でもある。

近代に入ると、明治４年（1871）の戸籍法によって大区・小区制がひかれ播磨国第八大区第九小区に属し明治22年（1889）の市制・町村制の実施によって５カ村が合併し「糸引村」が成立した。はじめ飾東郡に属していたが、明治29年（1896）より飾磨郡に属するようになった（『兵庫県飾磨郡誌』）。この地区の主な産業は農業であるが、東山地区は明治末年頃に燐寸工業が興こり、昭和30年代には全盛期を迎えた。奥山の造園業は大正初年頃より始まり現在同地区の大きな産業に成長している。昭和29年、姫路市と合併。５大字は同市の大字に継承されたが、「糸引」の名前は消え、小学校名や、橋名などに受け継がれている。



◁松原井（糸引井）の分水地点

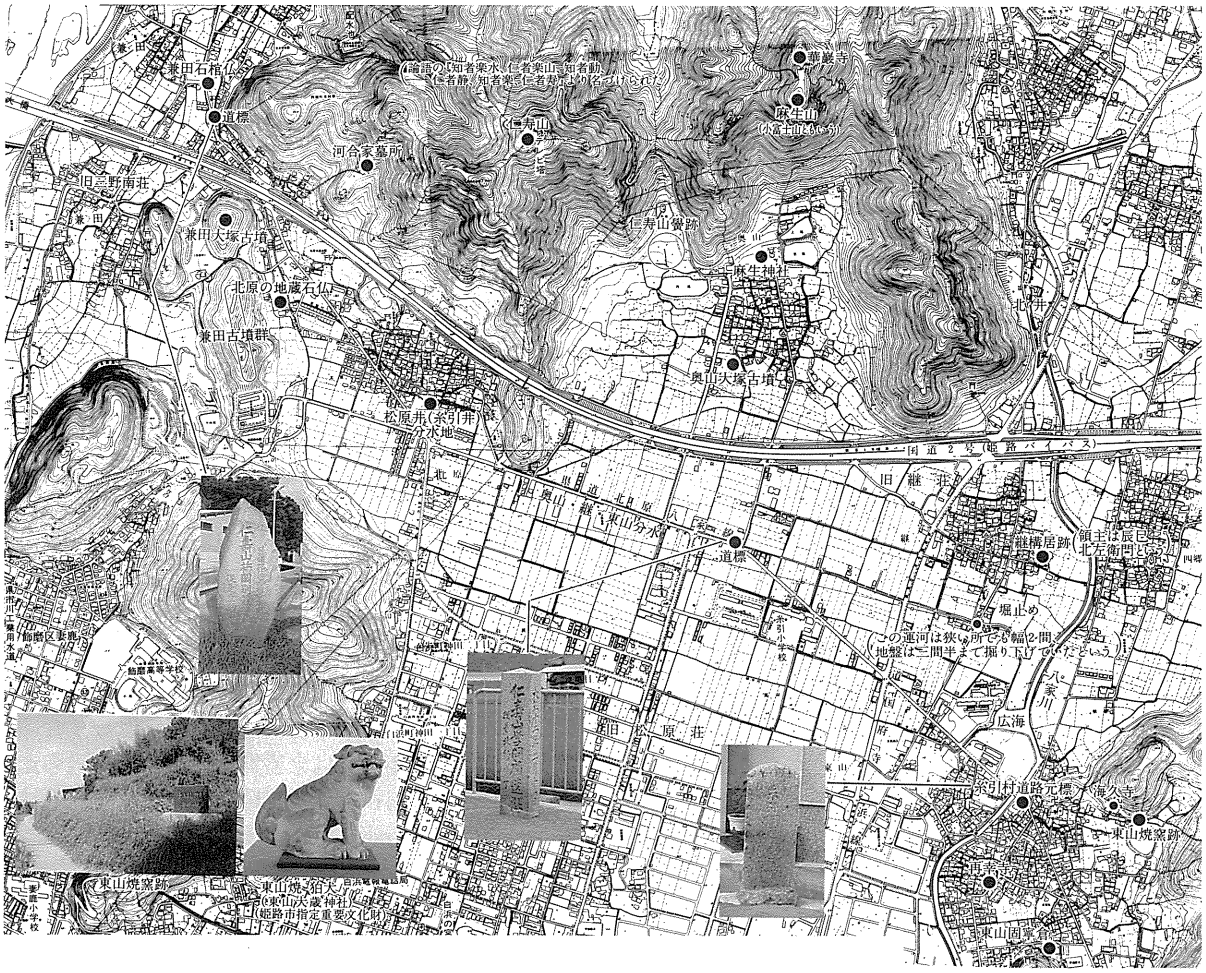
八家川（糸引橋より）



『兵庫北関入船納帳』記載の「東山塩」

松原井　別名「糸引井」とも呼ばれている。取水口は市川に架かる阿保橋の北にあり、東阿保、兼田、を経て北原で奥山・継・東山分水と松原・中村・宇佐崎分水とに分かれ、糸引校区と白浜校区の大部分の水田を潤すこの地域の重要な農業用水路である。この用水路がいつ頃に引かれたものであるかははっきりしないが、４世紀の中頃ではないかという説もある。かっては松原荘（松原・中村・宇佐崎・東山・八家・木場を含む地域）も継荘も京都府八幡市にある石清水八幡宮領であり、平安末期に松原荘の開発に着手した同八幡宮が用水を確保するために築造した可能性も高い。糸引校区には、松原井と並んで四郷町西見野大年神社前の八家川に取水口をもち花田井、四郷井の水を継地区北部や東山地区の一部に引く北井（北涌・北湯ともいう）がある。

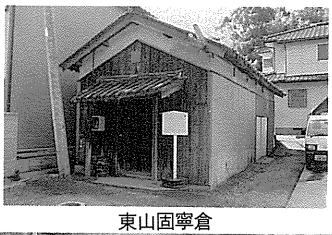
八家川　糸引校区の東を流れる八家川は継地区では「東川」、東山地区では「ニシラガワ」と呼ばれている。満潮時には海水が進入する潮入り川であるため農業用水には利用できなかった。しかし、中世から近世にかけて東山地区の八家川沿いには塩田が開け大量の塩が生産されていた。その後、新田開発が進み塩田は消え、八家川は木場港と糸引校区を結ぶ重要な水路として農作物や肥料等を運ぶ舟が往来した。河口近くには石組みの島を築き三つの反橋でつないだ三ッ橋が架けられ「小錦帯橋」とも呼ばれた名所があった。

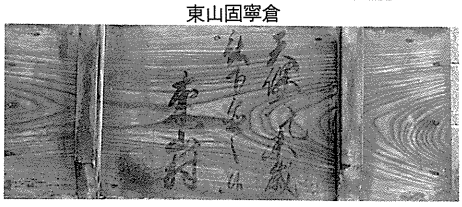


東山焼　有田焼系の磁法を用いた磁器で、初めて築かれた窯が黄檗宗興禅寺の東にあったために興禅寺焼とも呼ばれ、また後に姫路藩酒井家の御用窯として姫路に移されてからは姫路焼とも呼ばれた。創始については、安永年間（1772～81）説と文政年間（1818～30）に東山村の庄屋橋詰藤作によって始められたものであるという説にわかれるが、『加西吉野文書』文政６年（1823）条に「又東山に茶碗焼始申候」と記録されていることからこの頃に創始されたものであろう。また、文政12年（1829）に姫路藩儒者堤公愷によって著された『仁寿山記』に皿・盃・盞等が盛んに焼かれていることがわかる。初期の東山焼は民窯であったが、姫路藩家老 河合寸翁の産業振興策によって藩の御用窯に切り替えられ、姫路城の西の 山野井愛宕山（現男山）の東麓に移され御用陶器所が設置され、京都出身の尾形周平・水越與三兵衛等が招かれて指導にあたった。その後安政年間の初めに再び民窯に戻され幕末まで生産が続けられたが次第に衰退した。明治９年（1876）には士族授産の目的で永世舎が設立され、貿易用の製品が生産されたが、成功せず明治15年（1882）頃には閉鎖された。代表的な作品として「染付桜川写水差」「青磁登鯉文耳付花瓶」などがある。また、異色の作品としては「文久三年池田屋弥七」の銘がある「東山焼狛犬」（姫路市指定重要文化財）や東今宿の西源寺に「白鷺城頭於東山常吉製之　安政六末臘月・・・」の銘をもつ東山焼灯籠が残っている。

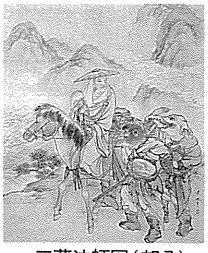
糸引村道路元標　路線の起点・終点・経過地を示す標識。大正９年４月兵庫県告示第225号により飾磨郡内には27ヵ所設置された。糸引村道路元標は、都山763番地地先に設置され、現在も残っている。

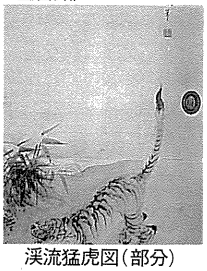
東山固寧倉　固寧倉は、文化６年（1809）飾西郡町村組大庄屋衣笠弥惣左衛門氏長や鈴木念兵衛等が備荒貯穀を目的とする倉庫の設立を河合寸翁に建議し、藩主酒井忠道がこれを取り上げてから領内各地に倉庫が設けられた。固寧倉の名称は『書経』の「民惟邦本、本固邦寧」の語から幕府の儒者林大学頭述斎が選び、扁額の揮毫は述斎の子檉宇が書いたものである。天保９年（1833）には117 ヵ所、弘化３年（1846）には288ヵ所が設置されている。東山固寧倉は、間口2.5 間、奥行5.5間の妻入り前庇付きの細長い建物で内部は二間に仕切られている。北面中央には片引き戸、西面には開き戸の出入口を設けている。扁額裏の墨書銘から天保14年（1843）に建てられたことがわかる（現在の建物は後年に現在地に移築されたものである）。


東山固寧倉


固寧倉扁額（裏の墨書銘）

再幸寺襖絵　再幸寺は天文13年（1544）に裕善によって開基された浄土真宗本願寺派の寺院である。庫裡には長澤蘆洲の子で幕末に京都を中心に活躍した絵師長澤蘆鳳の「海浜松鶴図」「渓流猛虎図」の襖絵や「三蔵法師図」の掛軸などが所蔵されている。蘆鳳は度々再幸寺を訪れ多くの絵画を残している。蘆鳳は享和３年（1803）に生まれ父蘆洲より円山派の絵を学び、明治４年（1871）68歳で京都で没している。


三蔵法師図（部分）


渓流猛虎図（部分）

海久寺　曹洞宗で山号は龍穏山。寺伝については、寛文２年（1662）の東山村の大火によって焼失したために不明。境内の地蔵堂には、文化13年（1816）に造立された等身大の地蔵立像、東山焼の創始者の一人である橋詰藤作の墓と東山焼の職人で「弥七コンロ」を考案して成功をおさめた池田弥七のために、文久３年（1863）に「村若中」が建てた池田弥七夫婦の墓などがある。

橋詰藤作の墓

池田弥七夫婦の墓

麻生山　標高173mの麻生山は、もと「葦生男」と呼ばれていたが、神功皇后西征の際にこの山に一宿し、麻が繁茂していたので弦を作らせたことから麻生山と呼ばれるようになったという。また、その姿が似ていることから「播磨小富士」とも呼ばれている。麻生山は山岳信仰の山で『播州名所巡覧図絵』に「山頭に地主権現と役行者を祀れる小祠あり、これ承応中明星院という修験者の建つる所とす、堂下に岩石屈曲して相違なり其中に清泉あり旱天と雖も涸ることなし」と記されている。現在、山頂には戦後再建された華厳寺があり、修験講社光明麻生講が管理している。

麻生山遠景

山頂の華厳寺

麻生神社　祭神は誉田別命・仲哀天皇・神功皇后の三神を祀る。創建年代については不明であるが、伝承によれば神功皇后が西征にあたり麻生山に登り大国主命に祈ったことから八幡三神を祀る一社を創建したことに始まるといわれている。中世には、石清水八幡宮領継荘の鎮守として繁栄したという。現在は継と奥山地区の氏神となっている。神門は元禄６年(1693）の建立であるが、平成４年に新築された。境内には宝暦８年（1758）の石燈籠と宝暦９年（1759）の水盤がある。また、参道には弘化３年（1846）建立の石鳥居がある。

麻生神社

石鳥居（弘化３年）

石燈籠（宝暦８年）

奥山大塚古墳　奥山地区には数基の古墳が点在している。そのうちでも特に大きい１号墳を「大塚」と呼んでいる。古墳の規模は、直径16m、高さ３mの円墳で竪穴石室をもつ５世紀後半の古墳である。昭和９年に発掘調査が行われ、鏡、管玉、金環などの遺物が多数出土した。

仁寿山黌　姫路藩の財政再建に大きな功績を残した家老河合寸翁が創立した私立の学問所である。文政４年（1821）、藩主忠実は、寸翁の功績に報いる為に幡下山麓の土地をあたえた。寸翁は山名を仁寿山と改め、校舎を新築し、仁寿山黌と称し菅野真斎、近藤抑斎を教授とし藩の子弟などの教育にあたった。天保12年（1841）、寸翁が没すると山黌に対する非難が高まり、同15年（1844）には藩主忠学によって廃止され、藩校である好古堂に吸収されたが、医学寮のみは幕末まで続いた。跡地は現在造園用の植栽地となり、井戸跡と土塀跡がわずかに残っている。植栽地の入口には洒井忠正撰の「仁寿山黌址碑」が建立されている。

北原の地蔵石仏　高さ約135cm、幅約80cm、厚さ約25cmの長方形の凝灰岩の板石に、線刻蓮華座上に二重光背形輪郭を彫りくぼめ錫杖と宝珠を持つ仏高約78.6cmの地蔵尊を半肉彫りしている。左右の輪郭上に「奉造立石地蔵一躰願主正阿／右志者真比丘尼性阿三十三回之追善而也／貞治二季癸六月廿四日孝子暫の銘文が陰刻されている。

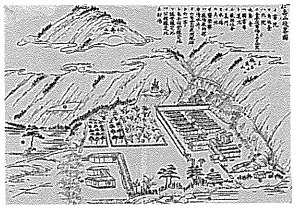
河合家墓所　墓所は仁寿山から西南にのびる梅が岡にある。四方に土塀をめぐらし、三段に築かれ、坂田町の善導寺から移した川合定恒や河合寸翁などの一族の墓碑がある。
土塀の西には、定恒の家臣で殉死した村山重兵衛の墓がある。また、墓所前の嘉永３年（1850）の石燈籠は、寛延２年（1749）の大洪水の時、避難民に城内を開放して救った定恒の百回忌に船場町人たちがその徳を偲んで寄進したものである。

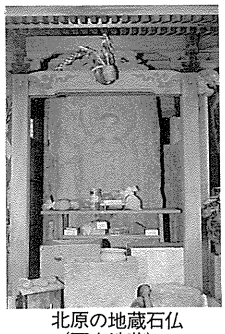
兼田の石棺仏　高さ約128cm、幅70cmの凝灰岩製の刳抜式石棺の身の短側面を庇に残し、長側面に舟形輪郭を彫りくぼめ、蓮華座上に像高約50cmの左手に宝珠、右手に錫杖を持つ地蔵立像を半肉彫している。左右の輪郭に「四十八日念仏無縁衆ホ敬白／貞治四年八月廿四日（追刻名）天和三癸十二月」と銘文が陰刻されている。

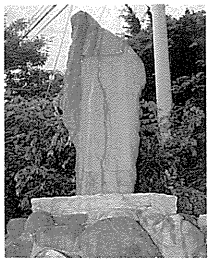
兼田古墳群と兼田大塚古墳　出光北原社宅から姫路バイパスに向かって北に伸びる尾根上に６世紀初頭に築造された６基の円墳が点在した。その内１号墳～５号墳は昭和56年に発掘調査がなされ、須恵器・鉄鏃・甲冑・円筒埴輪・馬と思われる形象埴輪等が出土した。尾根の最北端に位置する兼田大塚古墳は全長約48mの前方後円墳で、主体部に竪穴式石室を持ち円礫の葺石が認められる。副葬品については、不明であるが、４世紀から５世紀初頭に築造されたものではないかと推測されている。

■編集　石塚太喜三（姫路市立山陽中学校教頭）

奥山大塚古墳（墳丘はほとんど削り取られている）

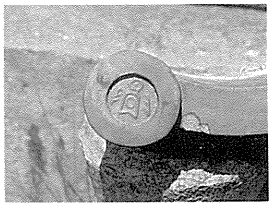

仁寿山黌址図（部分）


北原の地蔵石仏
（西山地蔵）


仁寿山黌址碑

河合家墓所

兼田の石棺仏


河合家紋瓦
（雀をあらわしているという説と鷹をあらわすという説がある。）

兼田大塚古墳（山頂部にある）